

信州峠

馬場慶一郎

信州峠

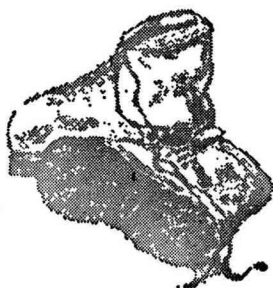


著者略歴

一九二七年、埼玉県飯能市に生まれる。

埼玉師範学校本科、国学院大学文学科卒業。

埼玉県飯能市立飯能第一中学校、東京都豊島区立要町小学校勤務を経て、一九五三年より埼玉県立飯能高等学校定時制に勤務し現在に至る。



信州峠

一九七五年八月六日発行

著者 馬場慶一郎

発行者 右同

埼玉県飯能市原市場七六六番地の五
電話〇四二九七一一七〇〇二〇
二三五七一一〇一

印刷所 (株)北斗社

東京都文京区本郷四丁目一番六号
電話〇三一一八二一四三五〇

信州峠
目次

目次

信州峠 5

少年 19

おじいちゃん 45

せみかご 67

ハーモニカ 81

京の宿 97

青梅 113

日曜日

119

小春日和

123

杖

135

山小屋にて

149

父と子

165

元日

171

「ゴヤ」を見に

181

あながき

信州峠

晩秋の信州峠を歩いたのが最後の山旅となった。それからもう十年たっている。

当時、既に足の痛みに悩まされていたが、山への気持を押えがたく、余り無理のない山として選んだのが信州峠だった。

以来、山というとすぐに信州峠が思い出される。若い山好きの人たちにとっては、標高一四六三メートルの峠など山の中には入らないかもしれないが、私にとっては最も懐かしい山の一つである。

信州峠という名まえがまたいい。爽やかでロマンチックな響きをもった名まえだ。私はその名まえにも心がひかれる。

この十年の間に、私の心の中で信州峠はますます美化され、理想化されてきたようだ。果たして今、その峠に立つことができたとしたら、私の心は十年間の期待を裏切らなかったことを喜ぶか、それとも幻滅を感じるか、それはわからない。が、そんなことはどうでもいい。現実のそれがどう変わろうとも、私の心の中にある信州峠は少しも変わってはいないのだから。

☆

小渕沢駅に着いたのは、午前五時十九分だった。ホームに降り立つと早朝の冷え冷えとした空気がさっと体を包んだ。降りたのは僅か数人で、その中に私同様リュックを背おった人が二人ほどいた。リュックの大きさや装備から一人は八ガ岳の縦走、もう一人の女性は飯盛山か、それと

も信州峠かなと私は勝手に想像した。駅の待合室でゆっくりと一人の朝食をすませて、七時十分発の小海線に乗った。

二両連結のこのローカル線は、時には喘ぎ、時には軽快に八ヶ岳山麓の高原を走り抜ける。いつ乗っても気持がいいなと思う。爽やかでのどかな雰囲気のある列車だ。甲斐小泉、甲斐大泉、清里と続く駅の名まえも詩的だ。ある高名な山を愛する詩人が、ドビッシーの管弦小曲を思わせる、と書いていたのをふと思い出した。

せっかくだと思い立って来たのに、空模様は余りよくないようだった。薄いミルクのように立ち込めた霧の中から、時々、墨絵のような落葉松の影が浮かび上がり、車窓を流れ去って行った。私は窓に顔を寄せて、しばし動く名画を楽しんだ。

八時十三分、信濃川上駅に着いた。下車して仰ぐと、やはり雨が落ちそうな空であった。先刻、小湊沢で見かけた女性も私の後から降りてきた。やっぱり信州峠だと思った。改札口を出てバスの発着所に立っていると、

「おはようございます」

と彼女が挨拶をした。

「おはよう。あなたも信州峠ですか」

「ええ、そうです。バス、何時だったでしょうか」

「八時半ですね。あと十分くらいです」

「ありがとうございます」

きりっとした無駄のない服装からも、山歩きに大分慣れている人だという感じがした。

八時半のバスの乗客は二人だけであった。バスは石ころや窪みの多い道を、がたがたと揺れながら走った。十五分ほど乗って原で下車した。

「ご一緒していただけますか」

「残念ですが、どうぞお先に行ってください。足の具合が少し悪いので、気ままに歩きますから」

「そうですか。ではお先に失礼します」

彼女はそう言うとき軽い足どりで歩き始めた。三十メートルほど歩くと、立ち止まってふり返った。

「私、峠でゆっくり休んでおりますから」

彼女は微笑して言った。

雨模様の上に引き替え、私の心は明るく、淡い期待のようなものがふと生じた。服装といい、言葉遣いといい、この上なく好ましく、美しい人だと思った。いったい、どんな仕事をしている女性なのだろうか。そんなことを思いながら私も歩き出した。

僅かずつ登りになっている幅の広い黒土の道が続いていた。昨夜、雨が降ったのだろうか、ところどころぬかるみがあつて歩きにくかつた。次第に霧が深くなり、展望は全くきかなくなつた。時々、冷たい風がさつと吹き、その度に霧が動いた。思いきり風が吹いて、一面の霧を吹き払ってくれればと思つた。霧の中の道をしばらく歩いた。晴天ならば、男山、天狗山、そしてはるかに八ガ岳が見えるはずだつた。道は次第に細くなり、傾斜もきつくなつてきた。左膝が少し痛みだしてきた。彼女はどのくらい先を歩いているのだろうか。霧の中に続く一本道は迷う心配はないだろうが、心細くはないだろうか。霧に濡れながら彼女も黙々と歩いているに違いなかつた。私は同行の申し入れを拒んだことを少しばかり後悔した。私は立ち止まってたばこに火をつけた。時計を見ると十時半であつた。もう頂上も近いはずだつた。立ち止まると、あたりの静けさがいっそう深まるように感じられた。すると、斧の音が聞こえてきた。錯覚かなと思つて耳をすますと、やはり斧の音であつた。杣人^{こまびと}という言葉がふと頭に浮かんできた。信州峠に來たんだという実感が湧いてきた。霧の流れが速くなり、空がいくぶん明るくなったように感じられた。晴れるかな、と一人呟いて私は元気に歩き出した。

原でバスを降り、歩き始めてからまだ誰にも会っていないかつた。

信州と甲州を結ぶ峠として、古来さぞかし多くの人がこの峠を越えたに違ひなかつた。新緑や紅葉の頃、心はずませながら越えた人もいれば、雨や雪に苦しめられて必死の思いで越えた人

もあることだろう。この峠での出会いを楽しんだ若い男女もきつといたに違いない。峠を越える度に、私はいつもそんなことを思う。今、この霧深い峠への道を歩いているのは、私と彼女の二人だけなのだろうか。そう思うと、彼女の存在がぐっと身近に感じられた。

「ヤッホー、ヤッホー」

上のほうから叫ぶ声が聞こえてきた。彼女に違いなかった。

「ヤッホー、ヤッホー」

私も大きく叫んだ。私は思わず足を速めた。

峠の頂に近づいた。彼女が赤いハンカチを振っているのが見えた。その赤い色が鮮やかに目に映った。

「お待ちどうさま。大分待ちましたか」

「いいえ、ほんの少し」

「霧があって残念ですね。展望がきかなくて」

「ええ、途中で少し心細かったですわ。あんまり深い霧でしたので」

赤いハンカチと思ったのはネッカチーフだった。彼女はそれを首にまいた。

「食事は」

「まだですの。ご一緒にとまって」

彼女はビニールのふろしきを切り倒された落葉松の上に敷き、さらにいくつかに折った新聞紙をのせてくれた。

「どうぞ」

「ありがとう。あなたは」

「余分にありますから」

彼女は私の隣りに同じようにして腰を下ろした。彼女のついであくれた熱いお茶がおいしかった。霧が切れて視野が開けた。落葉松の林がなだらかに波のように続いていた。

「すてきですわね。晴れていればもっといいでしょうけれど。でも、霧に包まれた峠も趣があるといいですね」

「そうですね。こんどは晴れた日に来てみたいな。きょうとは違った趣がありますよ」

「私も折りをみて、また来てみますわ」

「さっき木を切る音がしたでしょう。斧の」

「ええ、聞こえました。信州峠らしくていいと思いました。霧の中から響いてくるなんて」意を得た答に私は嬉しくなった。

三十分ほど休んだので出かけることにした。じっとしていると体が寒くなるようであった。

「と一緒に」

彼女は遠慮がちに小さな声で言った。

私は前のように断る気にはもうなれなかった。別々に歩くことはかえって不自然のように思われた。同行を望んでいるのは寧ろ私のほうかもしれない。

「さっきは失礼しました。気を悪くされたでしょうね」

「いいえ、ちっとも」

「足の調子が悪いので、つい人と歩くのがいやになるんです。本気で歩いても遅れてしまうものだから」

「ご不自由ですわね。私のことはどうぞお気になさらずに。時間は充分あるのですから、できるだけゆっくり歩きましょう」

山を歩き始めて十年近くになるが、こんな経験は今までに一度もなかった。日頃無口で社交ぎらいな私は、山の静寂と孤高を持するさまが好きであった。だから、山に入るといっそう無口になるのが常だった。そのような私が何の抵抗も感じることなく、彼女と同行しているのが不思議に感じられた。私は彼女が何年も前からの知己であるかのような錯覚すら覚えた。これがもし、町の中で会ったとしたら、おそらく二人は視線すら合わせることなくすれ違ったかもしれない。私は信州峠で彼女と会った偶然が嬉しかった。

「足、大丈夫ですか」

彼女は途中で何度か聞いた。右膝の痛みは前よりもひどくなっていたが、それもさして苦痛にはならなかった。

「大丈夫です」

私は敢えて元気を装って足速に歩いた。

空は次第に晴れてきた。黒森に來ると瑞牆山みずがきの岩峰の一部が、その男性的な姿を現わしてくれた。水氣を含んだ紅葉と岩肌のコントラストが鮮やかで一幅の絵のようであった。釜瀬川の溪谷も美しく、清冽な水が豊かに流れていた。道は釜瀬川に沿って、バスの出る塩川へるとゆるやかに下っていた。

「もうじきですね」

「ええ、ずいぶん早く来てしまいましたのね」

彼女は一人言のようにぼつんと言った。

☆

午前五時半、看護婦が検温に回り始めると病院の一日が始まる。その頃、高台の三階から見下ろす東京の表情は、まだ静かで爽やかである。わが家ではもう子供たちが起きたであろうか。この朝まだきの爽快な表情が、刻一刻と喧噪けんそうとダイナミックな都会に変貌していくように、わが家も子供たちの目覚めによって賑やかな活動を開始する。そして、妻は終日家事や子供たちに追

回される。私がいないので、子供たちはいっそう妻にまつわりついていることだろう。

入院してから既に二十日たっていた。検査はまだ済んでいなかった。遅々として進まない検査に私の心はいらだち始めていた。

私は時々、妻や子供たちのことを思い、将来のことを考えた。そして、暗澹たる気持になることがあった。このまま、次第に病状が悪化してゆき、万一動けなくなったらどうしよう。妻や子供たちの生活はどうなるだろう。そんな暗い思いに度々襲われた。

入院する二日前であった。私は子供たちを連れて家の裏山に登った。せいぜい二百メートルほどの松の木の多い山であった。見晴らしがよいので、私も子供の時から何度となく登って遊んだ山であった。力を入れると膝が痛み、思うように前に出なかった。私は痛みのする無力な足が歯がゆく情けなかった。子供たちは私をおいてどんどん登って行った。

「お父ちゃん、はやくおいでよ」

子供たちは何度か後ろをふり向いて叫んだ。その明るい声が、私には痛いように胸にしみた。私は是が非でも直さなければと思った。やっと頂上に着くと、

「お父ちゃんがびり、おそいなあ」

と言って、二人は私の両腕にぶら下がった。

「茂樹がいちばん」